

川 野 泉 菴 之 書



1	新	8
15		
3		



内外新報第廿一號

慶應四年閏四月廿四日



○
 四月中旬の以件勢邊の港を出帆志し高船に乗
 きてゆりたる所人の活し又出帆の前日十月筑前
 の軍艦甚港に入津せり是中又士官多く乗軍艦に居
 たりし其船の奥にお九條殿下其外の者をかゝるは
 た多し船形も然るに仙臺より會津退付としく兵と
 出しまるに其兵白川を以て宿陣せし秋分津の勢勢
 に河の仙臺勢敗走し多し故に世に思し援兵を催

役せん多し大坂より中むくりの赤金と借ら後し
よし

④ 去年九月改め江戸市中の人口戸籍洞帳の写
一町方支配場町人熟人数多

四拾万七千零六拾六人

世帯数拾万二千五百五拾

但し家持地備店備石仕者迄の負数

内 男 五拾万八千九百五拾九人

女 五拾万八千五百零七人

一寺社門外町人熟人数多

八万二千九百九拾七人

世帯数五万零七百五拾

内 男 四万零九百四十二人

女 四万零四百五拾四人

通計五拾二万八千四百六拾三人○電報拾二万二千八

百五拾

内 男 六万九千九百零五人

女 六万八千八百六拾五人

外出張の者

男 二千九百九十七人

女 一子零拾九人

右の苗歳迄の人負あく世化支配遠の町人終及者系
剛完あくも武家の家来の世殺よりくは

○

申介新聞中四号に載せしる音害の悲代括囊報と記
すく成人の一封書亦我社中ニ投與せり始より新聞の
益盛大あらば賀し終より各報の重複多き責むは言
實又理りうと雖ども撰者一手ニ出ざるは以て亦之を
如何ともするをききの意固成社之を各するをせり是を
外篇の圖より申介の羽翼にして雜報亦内外の教吹と

を極めく復出を疑ふと雖ども於偶合あるを免すは况
や頃者江湖新聞遠近新聞新々事略の類筆出しと既
六七種之多きよ玉きう安んぞ終く之を防く事哉得人
や然きども其甚しきは玉くハ我々全文を棄換し之
を横濱の訳稿に託し或ハ英佛の写本と矯たり遺意の
圖画を挿入する者ありとすく其撰採如何や當り
新聞報告の旨報を失ふのこれハは是をしく稗官不
正の書と同じかしむ惜む事々の甚しきありはや我
書思らくは世禁一旦止まれば亦相倣ひ遂に根葉終極
人として厭ましむるの由は玉くハ吾石の衰滅よりく付

つゆさのつ然らん則今日の盛なる城又喜ぶる一と雖
 とも安んぞ明日の衰へざるを保せんや是を我書に深
 く憂とまるところなり異くの將來刻成の日互ひに各
 率と交易し有無を悉照せんを彼は倅の倅あるの世は
 省き世は裁まるを彼は剛を勢めく公正にゆし踏襲の
 弊ゆるししめを則倫敦府百六十海局の多きも亦企て
 く而して終まべり豈困化の一盛なりや他を一時
 並刻して冥符暗合するの世俗を以て規を可らざる者
 有り是我書に各社幹事と望む不似としく保せし或人
 の厚意に吾る不似なり

○同日月十一日出福崎よりの来状

仙甚度人救出湯に八百人程相固め當時合戦無く白川
 表の本宮に二本松にありの事分り相成り別に中山石
 邊迄少く合戦有るに事唯今少くは合津勢領内詳あり
 しと中取引取表事又相固めは振子替く合戦無く介
 以相馬度二率松に白傑出し之妻度白川に白傑出しの
 中津勅使に之位殿兼又官軍薩長勢凡そ四百人程度内
 退討としく清川口へ出張統くは山形上の山の人数傑
 出し又相成りありて我率相始り官軍方不勝利く中
 日天臺落城市中八九分通り焼失お又官軍清川口に引

以交八日約より長■と中地より庄内勢と以遠合戦相
 始里右又付山形柳倉天童等大勢操出又相成以一を定
 めく大合戦又成り中登くやと山形分中來以山形本庄
 何事も互交市中不踏家賊及具死か之付女子老少の史
 く互方の退せ以中九日上杉侯人殺予人復引率し板
 岩泊里以く尚不意以津通以素形一以十日夕方津家
 老毛利上総凡二百人程あり尚不く止宿今約出之相
 成仙臺は津出く執又津産く鳴よハ世度今津征伐く津
 兵扱として津出張と中事より産く多ふハ和睦又相成
 以ちんと一日大勢死在ハ

羽州天童藩城の津流才女二号又出ル

○同日月十日或る藩士の活し

加勢之家系信州の大名十萬金津返討を命せしむる由
 藩の先頭中津不審く以節有く人殺固也場不引拂以是此
 節右之節相分至金津返討先鋒也 修付以よし未だ津
 信ハ致さば以ゆども最又尾羽兵隊高田を離るること
 甚重本程の不まぐ集り居る以以付殊く介不意不都合
 のよし高田く板子あくの喜田の藩を人由金津江向ハ
 以者ハ有くまどくとの噂は津産作

元是徳川股肱臣、何心阿諛苟全身、他時若遇天兵起、屠盡□□城裏人、

作者不詳

○

内外新報第一號より第七號に至るゆへに校正出来し付近日再板合本に以て多し賣出し可申也

内外新報第廿二號

慶應四年閏四月廿五日

○信州善光寺よりの来状

四月十七八日の以越後より田原荒井宿へ逗留の脱走兵越後路より信州松本を通りし付宿々人馬往來甚だ滞り出し尤も此里是宿の傍に千石百人程用盡し是れ以て先宿有る版山願代所宿役人々存し執成之へ海出の申あり幸多作より志田家に負接し是れ相報し然るに廿一二日以脱走兵版山城下一へ繰上りて是れを於て戦事了後旨談判し相成本多家を解系同素致し寤し松

代々援兵を相結ひ飯山城下脇より小隈川原門落合に
 川有る渡取不仕脱走方より引揚以て至程去回勢出強右
 川を隔る安回と中下へ陣死女八日明六時色々大砲小
 銃打掛け戦事又相成脱走方大砲奪て遂に戦戦し飯山
 城門外より退城脱走し以て城中述い至本多勢一時又城
 門を閉き砲發又及び以故脱走兵悉く敗れ城下市中へ
 放火し行きの逃去し申之間又去回勢取を死度し屯
 板城下へ到至活徒ども面を以て度相結し同城を隊隊長
 繰之以て相成り脱走方死傷又十人餘板代方即死走人手
 負ありし中板代上回尾所等々人救退し繰出し以て得た

去回勢一手ありて戦事勝利し申引續き越後路へ人救
 向残徒退討右諸藩より回へ浪徒の内通り為致し度掛
 合又相成り去回度為致し終に執板代所より結し外敵
 重少く而して関門を建固め殺し相改め申

○志州為羽藩屋書

兼之津屋中より通る平右衛門後津不審之筋有る入京
 江止し執於京地江 給出在取あり慎死在し以て是處
 或は存為歎歎去月廿八日在取表出之月廿八日関張江
 到着後懐仕居し申門晦日入京江免し以て津達し執石
 川宗十郎板代通甚者依之為月廿八日不出去去六

日京番仕の陣中感の世後山屋中との以て

四月十七日

猪垣平右衛門家来

小菅根市左衛門

○補遺

安房家の士水戸街及少く 大君の御旗印を見らる打
と戸細代の時駕参り少く御旗をとけ黒徳御旗紋付の時
羽織を穿石御旗印を遊御旗槍を本も穿く其在極を見
穿るく涙を流さるるを於し御先へ杖拂体く者制止勢
相懸ひのこにく御旗の中少く御勢懸ひ者形へ去行
身も平伏存をいよし

○四月十一日出山飛よりの来状

庄内より繰出しし人扱

白石慈恩寺造

惣大将 高二千八百石

酒井兵部

軍大将 高二千石

石原藤助

軍師

加谷野清助

先陣

中村清藏

天童に

中村次郎

新徴継子人附隊

佐沢浩

堀 平右丈

石井重助

新徴經八百人附隊

山形に使者

白井庄助

笹 仁九郎

惣勢凡三千人

右の人殺亡指越志津本道方、意恩方、佐沢右、八百人、陣九里、白井、仁田、篠庭、村邊、門岸、八日の九の旗、揮、急、大

砲の音、日く、烈しく、相聞、内、然る、事、又、重方より、門、岩、坊、は、出張、互ひ、ひ、^{ニラミアヒ}、白、服、合、一、古、日、程、打、合、い、事、双、方、二、人、宛、人、是、傷、付、い、中、加、く、く、山、形、より、門、口、日、二、番、手、操、出、し、長、傍、より、遠、摩、村、へ、陣、九、里、掘、金、勢、と、一、手、又、成、り、相、固、め、居、り、元、々、在、内、へ、右、同、意、致、し、い、故、く、も、官、軍、又、對、し、く、い、事、を、見、せ、不、中、と、固、め、の、く、く、日、を、送、り、依、て、官、軍、は、急、し、い、操、子、も、相、見、へ、事、端、あり、双、方、急、急、警、り、い、中、は、く、庄、内、方、より、空、砲、^{カッパ}、打、と、い、事、山、形、勢、大、又、警、り、減、又、玉、之、め、砲、勢、い、多、し、い、故、又、付、在、内、方、之、腹、に、及、び、大、小、砲、打、か、け、遂、又、戦、事、と、相、成、り、山、形、勢、士、分

武人討死柳倉是怪人即死外又三人討死屋内に
 此武三人討死者以中刻古河の落合と申す以之
 戦闘屋内穿手討百人あり三人討死山形勢又人討死
 是敗軍引死中以者同刻屋内勢天童に押寄せ城の裏
 手より大砲打掛け以故一藩必死と覚悟を極め切出
 以新法敵方火の手熾ん又相見へ以へ死す打
 合城下家中焼立思ふ候又戦ひ以中屋内勢焼逐以之
 老の森百町を焼拂し相成以天童宗老右田大炊主従
 又六人引く敵兵七人討死以以在衆寡敵しがく下
 先至事又引上以酒井方之捨人程戦死織田方七八人

身死有之先ハ勝利と申事又伊達以但落城し方上以
 以故略し我死以多し以中屋内方も人殺を集め長沢
 陣を引死中以以倭山形へ攻寄せ中極子又付仙臺
 へ官軍より退く不并と以之退進し及び日六日流砂
 勢八十人程笠谷峠を弁越し山形光助より看陣為又
 仙臺勢七日宿通あり日六日十人程引く又分退し官
 軍到着以相成日夜下桑野達摩寺村迄へ光助奪より
 出張有之細屋所に相固め屋内方へ打入以極子以
 伊達以生後大砲の音に及り程お守へ窪が内村等聖
 村天童を護送村に火の手揚り以未だ勝敗

を相分る不中い

○茨原宿より中來りて風岡書

當月十二日戸塚宿に里程を京所回とて取次ぐ八五
不尔人隊既の上しを人切腹外に之人も多分同部と
中事右に去る九日日光表より逃帰るに若以付世為
脱走隊長より切腹は付中付以中付以津産い

百一

内外新報第廿三號

慶應四年閏四月廿五日

○同日月十日日出藤沢宿よりの來状

本月十二日夕刻相州去務浦とて中夜に脱走兵凡そ二百
人許り取より上陸し多一箱根山を打越通行は相成右
に沼津に掛合の筋有とて中風岡に由る以上く小回
系より六百人程人殺出張いそいで中

○同日月十六日出同宿よりの來状

小回系は吾越に脱走共之百人程同本寺院に屯集い多
し右人殺の内竹是く集りて亦不打營營少く尚宿通行

百十一
有之今十六日也又延住返市座の且又大藏平保へ同
人敷く内孫越族宿の多し居の介八王子不在又の高地妻
甲那越知村に晚き隊之百人許に集り居の在小回系に
所在の同経はく字が宮房徳等と我率より相巴里の者
の中右隊より世及掛合く筋有る小回系に孫越先方返
善以奇合残より相成をど百姓どもへ十少返く人敷相
坊の中は座の

仁和寺と書才女七号と記載を

因月六日小乗とあ不負のり又遭へり女七号と出

中津原歎願書

此悲憤の故に徳川□□候今般 朝意より有き此
と以て大道を及く天罰を其衆候と以て其怒入の終る
以時年二條城引掛大坂城は常在臣下過激く徳精く結
極存在の中へ不果も之日 一件又立列り此等金□□
の本意ありを執り候事亮□□の不於来より其衆を
以候今更寸分の中張り無事座の臣等遣り実以て怒懼
く玉と其意終る事□□儀東の以候此悔悟漢性幾重
以て 朝廷に恭順く及相意度と敢て関西言衆地有る
向も速く引取候初より其情を不從程先墳墓の地は

熟慮を天下に盡し若し智一此を以て備之 天
隨之を得たしより外他を憂へ候に顯然見聞仕以義に涉
産以潤何率右に據実清涼察に成下已恐徳川家祖宗に
来し勤勞を以て思ふ天地安樂に 思ふを以て寛
大に御不重に 候付下以て予に難有仕合に甘
品遭幼弱不肖前後に清時合不其取知右極に候中上以
才身忠入以得た徳川家の恩顧節に及ぶ者も以て
其何ふ不慈待親望視此度附眾に奏付清時を以て清
く清時甘中上以伏て候く思慕に復清時を以て清聞候
此誠の極に血を歎願候上

二月三日

奥平義徳守

○四月廿九日

尾藩

田宮如雲

松平肥後守孫及逐相慕尾張以下遠に及迫るに就
相聞へ以願主若大納言に追討候 候付以聞其方清
暇以下に百足力成功を遂げ候に 候付以聞其方清
一 城内國事勢局判事免候

○伏見より來狀

高田家老中根重次郎と申者先達より京師へ出立候に

此程は藩勅 且く道相立く用誠不致る旨津建前より
以付主人に申渡され仕と昔に申候く藩長と主人宛
加勢本村九右衛門と申者都合三人附添四月廿四日
系記と致され

○宇林宮屋書

土佐守在下登州宇林宮表に隠居致さる高貴に誠居り
交する八日東山道津藩府より津建前より板倉伴賀守
様曰美之助様は後誠前より津建前相成り高貴に誠居り
申致り百廿四日申上と致され

戸田土佐守家来

四月十七日

何某

○補遺

一板倉賀守願不備申松山城は徳兵衛守向い用誠以り
其前家老徳田恰武百人を引率し伏見戦事へ加り
裁く疑義有る直搦六ヶ表に故後く輝と致し遂に切
腹以りし赤心を表し士分武百人を徳兵衛に託し以中
但し備藩の恰の義人を感し将令之助へ之百又指
石の書付を奉へしとぞ

一松山岡城は其初段は一戦以り二及び形勢く予備あり
儀編に随ひ恭候又決定し在城く士分二百人農家へ

階居の多し藤中越人殺六百人はく備前へ移せし者
二百人日光山に逃走の者二百人ありは分敷
者又二百人件く藤中妻子の夫と縁者へ役りし中

○四月中系教より諸藩にのり布令書

今般王改所一彰殊文尚長岡東進軍少も相成小事は付
元幕府の制を以て法度家族より家来を定府に在り
而して國元在りしは速に引取れ終付支勿論右所法
と不為唯遠相を疾速に引取れ向も有る共又相付へた
次才より就くは一彰引掛又ハ只今居残る妻細の
系來の十二日とて内弁事勢局へ十出の振込終出の事

他十二日以引掛の向の事有文より電出の事

○補遺

○三月某日長崎平兵衛建白之ケ條 有極川宮

長崎

一 世本國東 所親征へ候不了と進條 所出與所を以
てい萬氏強授の事あり候思多し也 一 夫より自之也
海人民善惡とす物に付世候所心め奪してを思
望願大社の基とて相成也
一 外國人 所隣えへ寄せ付くといはは弁考と掃攘く相
以てむく惟くを力了仕や必事 内各不直の事

一 天下の政事の必徳川家と為し愚弊の諸藩を而儀
以外交の事々何そ之百年未大改仕来り天下に人民
為伏有るを以今 王改優古に之公家諸藩を入改事
有ると雖ども其人殺つて多く費へ文の伏有る事
多き如く何つとも世終に其を以て終に徳藩命を
有き同國の之相固也天下の事為め不相成に百早
と徳川家へ政權を元の如くはしめしむるに思ふ
大紀の基脈おのり有る治要文に云々事

内外新報第廿四號

慶應四年五月廿日

◎仁和寺上書

嘉彰仁和寺相續齡十三の秋に遣^キ 勅書と甘し出家
得度爾来一黙々法燈を挑くと雖ども中心全く佛界
に為せ給長むるに及びおしく文字を勉むと雖ども
空しく光陰を送るの之を知らばまされ 勅旨に
遠んとまると其源道は難し慙愧に情日夜止むるに
以て去る九日と奉^マ 固く頼^マ 還俗を免さるに之を
命を蒙り思懼屏營職勞^マ 就^マ 雖ども勤儉か弱

冠と過ぎ方力空置遣は懸懐を憂きもの方今 皇國
改權一以 朝廷は為さず得ず哉一日と期會宴に万
世不拔く業を而を如何に存するにぞ 皇國今日
く形勢にむくは事外國人未港く日より起る今是を
挽回するの道は西洋各國に改体事情を知るに何
中間に仍き親る者ありと雖ども在りて人未だ航
の泰を圖かば下ゆらにしと通せざるを凡百の事
仍るをざるの憂あり嘉敷自ら懇懇して曰く公聞に
宵くと雖ども一言多るに志あり此上燈下の微見の
とありて天下の事行そし難し故に今日賢徳聰明く

公行に謀を忽ち一才と挿んが萬國に航して外國
く情実を親親し彼の長短を洞察し然るは為却以後に
方歸化の道を圖き遂に 神州に威武を著く六合に
輝かしめんと欲するなり嘉敷忠を 皇國に湯を不
以の候は外事に在り何ぞ頼く 朝廷は素志を涼
索し迷はれ裁を賜ふん事を以て 奏聞宜しく入に候
思儀慎言

嘉敷

儀定中

○京師より諸藩にしく達書

近未大改官以て旧徳を出版し廣く天下に 所敷若紅
遊い候い上下貴賤となく 所改道筋を致取せしめ一
意以方嚮する事を知りて象理を踐行せしめんとの
所仁惠の多きを以て付諸國裁判諸道鎮撫使諸藩面
居等之清済に相成し事以て同大切に先計ひ遊邑遠阪
未く以て玉を不候振 所統有貫儀に振迄度て相成り
事

但元幕府より元初代元代官支取下りい世度先務
を以て存し置りて不致通達す於陣屋向等にも
宿等々爲す相違ひ事

正月

○腫病ある者の治し

申仙道桶川宿の先はく之事形をしとら世にハ御道筋
左右の田圃より青麦繁りて生長せし或る日一隊の軍勢
いかめしく装ひて世所を通り来るに農夫の馬又六疋
お懐き荷を負せし者來掛りて軍隊の先へ駈越んと思
ひ畑中の裏路を一さんにかましおしりも盜賊の跡ある
とく農民たぐ執事せしお統の音聞へちりて彼の軍勢
伏兵あるとや思ひてん隊長先んて先んて跡を以て見
まよ遊去しが固より敵の所より追ていそ房々

毛し若拙等元まとも何まへりけきしと其意の村童と
も笑ひし其の暇病の士へ今の世はもつろくそと或人
の借らししとせど暇病も習たしはく勇士に相違る者
と見ゆ漢土の國の以拓者長とつろりの何れ城中に居
ありしが俄かに敵の攻寄る勢と聞や吾や此意おの
き免よ一室に駐りて戸鎖を閉り既よ久夜具打被り
伏居多り合戦本日終にしく稍く一面を占せり其時
又い勢出くを馳志多り其次の日ハ戸口を占め我の備
息を聞たりて又四よ五と乃ち自身橋を崩さく花と安
岡こしと九妙妻秋に因く多りさきハ暇病相つとく一

生弱きもの何れを必走卑怯者と侮る多し

○小紫仁右衛門書

私本家小紫上野介去る正月中土着相く通るに於て以
以付二月廿八日知行上野御馬廻松平に去る土着
孫を以受去月廿九日官軍松平右亮板倉重計松平
藏丸凡人救之百人程上の倉室を繰出し尚月廿日上野
介と長槍田村は操入右人救く内意を以りの孫然し以
て小紫上野介父子は成敗しつ中旨熱管岩倉殿下知
旨相違しと又大小砲共つ相違旨相違し以て付引渡し
又一條の来る之日高橋は相戦しつ中旨掛合に付同月

同日同人七ツ時以日不古志仕旅家致し日不古と同日
日常口舌出ア中舌熱智より紅冷液以執以く則又一
以石連以家来之人く大小を揚け日七口九ツ時言傍
町林以不古之个引連是白海居屋替く相付以へども
文以尋く筋も多く牢屋處へ一門石連是以以付所致以
安後右七人く内中間之人の相居ア中舌出致く者中達
し又一初め三人を斬首致し中間之人共吟味中入牢中
付以中舌入牢致し以中間も多く多傍町安國古と中
寺以く官軍より出牢中液し則出牢致し以又付在く者
多傍町古出以中舌控回村く者以出會上野介安吾取り以

同日人條光時六日朝日ツ時以上之倉河系に於て文
以尋く筋も多く上野介始め家来之人斬首致し以上以
て同人不持く諸道奥家来ども不持く衆とも残らば若
造里致し何方へか持致し中舌取入居場より右の
者内寺人存留り出府前書く始末中聞以間不允致世以
涉屋中上以以上

閏四月十二日

小栗上野介留守致り

小栗仁右衛門

○

今月上旬に以會津家老仙基の先鋒軍門へ降伏附眾と

しう存出の以付白石津陣とありて會議に及之旨津
達有之依之諸藩を収束近之白石へ森會の坐仙基より
中來る

○某が一の君卯月の初め飛多志の國へそのし
給ふよし取置

古くもあつて筑波の山にわづきんをきひ給を
照くさあつたん

三月朔日會藩柏原源兵衛 天朝との歎願參與衆應對
の始末并神原清記歎願書号才廿五号に出る

内外新報第廿五號

慶應四年閏四月廿七日

○德本世子は松平泉村より留守居といふ事出
し書面写

外臣某叔と後て德本侯の世子君左在執事に捧呈仕り
及思為藩津條も百年末在文左武原と名教津邊奉給
遊脱に足利氏燧燧と雖も津舟與 王幕共に平道と
在るを於徳川津家にもとむ百年と今日に及るを於
野舟依頼實に 皇國と津藩法に在る成天下奉る森山
水斗と某叔といふ事 王政津復在天下行一新く把握

世子名刑法事勢之重職法選任多為嚴以所誠以天下之
 大孝教服膝踏之至以不慈有者就之其去之門下之
 殊獨仕以之七無法危以得之弟死之犯之殺之若上仕以
 行率親善之眾法憐然以叙下外其某思懼哀訴之情實法
 至顧以不垂以之七不世之清大恩難有仕合其意之相
 又今殺德川 大君不測之大罪多為兼東嶽山之幽閉墊
 居側帝憐愷後之 大哉之為為以所誠以以之罪天痛
 哭之至以憐之或前頃之不完妻妾仕以作 大君法事元
 末清德後之清德慎以多為在以此清家清相續之其也法
 其也之清後見之若より只管為 王之恩石以之其法持

清相續相成以之是才一法及人等之後と身と管一也清相
 續之後將軍職身之清固締相成以以共 王命不以此竟
 以清受職相成以以苟也心中使む不智之とあわくは將
 軍之權藏誰も求之て更之也其清後等之ハ清及人等之
 才二と其存之其後清不徳之往徳く及躬清自責元以將
 軍職清尋退政權法返上之故以玉よりてハ行とて其申
 上以我之百諸侯清指揮も不相叶 神祖清創業之六指
 所所以也法難也相成以事之愚丈愚殆と申以とも承知
 之仕也之成之百等之清時業一也以之為捨天下之儀
 以任也何分以也 王政優右之清紀律相立 皇國之清

南光又大海以新為輝度清赤人の儒代諸侯く練女々也
 清採用多し決然清英鈔有之の全く公昭正大 天朝
 清為崇清恭順之跡王より之清少の有之無く頗る推庸
 豪彦之口以有 王攘夷之唱の以類との天壤の懸隔に
 了有之苟も及心有之に於ての惟る國に難生職を失ふ
 如世而業仕る無れ是之清及人無之尤明澄く才三に清
 彦之於東海清瑛類之清間より俄に二乗清城上清退去
 之在如何の也 王命清道其積之諸臣之勅揺之清法接
 江戸表之も常く清少法有之竟に坂城口清勇退之既是
 之清及人無之明澄之口に以て彦之其後尾越ありて清内

清以付後清上洛する有之交清供先く以遠く或幸以及
 の若無勿体も御旗立向ひのより 天威咫尺清思
 惶の之軍を清見捨さるるに全城湯地を為るに物
 も不れ殺獨り清東海に相成り後右に城に武門之恥辱
 不載之と子歳之下又下省之儀も不存存く世時に西
 王命の一も清及人者之に於ての良言を待多然多を
 以て有 王清恭順之清運びより右も清始末に玉の清
 是又清及人無之尤明澄く才三に清彦と相清東海之清
 流石儒代恩顧之儲藩旗士もおかりに清再奉之候身命
 七抛ち日夜練卒致りたりも御新搦之清氣也七身之世

上御旗東下より才以第一敵討い多以者有之と云々
 予が首級を以て日しとの上表に之を起下し海を以て法
 辨恭懿懐公管 王健を以て討つ世時に高り第一
 及ん宿之と云々の諸軍を引率し上洛 嗣下は於之
 是曲曲を以て陳正有之いとも未だ進まじに之を竟に
 後中無之既足又及ん之を以て明燈之才六に法在
 後法恭順を以て伏罪し法陳情法在法以て法共
 法赤心貫徹不仕い亦六所法親征く大命下を以て
 一規く不進無之索敵山中に出入法誓居天に信き地
 伏し是思懼前法を以て管法一規く上は法引交諸侯一

以乃と云々旗下し士に玉を以て之を以て石投い法
 何程に之を以て在い我是法及ん之を以て明燈く才七に法
 い有之通に法法い之を以て天地神の法照覽法及情に於
 てい毫末も法を以て乃後い才我は法家恭向く傳聞い
 定之齟齬仕い法も了有之其法い也去世也 王政法復
 右天下く更始法新政く初め寧ろ不種又法失諸法在
 之も好ましく法大徳民を以て法洽仕いし法徳に人民感泣
 帰仁を以て法究く慈母を以て慕ふ如く法 王政は日月新以相
 立了中法実い 皇國は法乃め 大君は法謝罪法也徹
 く乃い法乃在問我報命 大君如何法は法罪跡法在

いとも既に殺代し將軍職を放一且古格傳を以て
 以上を清無情し清乃るを在る亦且須令 大君の誓
 く誓いし心 東照神君 王室に清力を以て天下を氏
 の為め固るに格活し不幸苦を成ひて之百年今日
 に玉いと天下を泰ふ安に誓き給ひし清勤芳と下快
 樂と日じく心ありし仁大君を以て思仁徳川清家と美
 清春顧し乃るを在る亦且刑法の國家に大典宏則
 王者に不怯格勵誠に勉む欺に懼を以てき辱らるるに
 繩墨俄に陳移る欺又曲曲成ひて去心かゝり伏し教く
 賢良の世子徳川 大君 王政復古の時正去り清

徹意を以て清の衣職を清輔佐中の徳川清家と清推
 卷下の美氏を清仁愛を以て天下具瞻し不望に此
 為副心たるは其多年當に清下風を尊仰慕い素人の空
 しかり美氏を清恩深に感載し仕介其某放之伏續
 く罪を犯し後之言上仕介其某悚懼恐惶し玉に堪へ
 を願首頓首死罪死罪

月日

○世の中さかき清は清とてき清は清とて清と
 て

めしよ世にわたりてあまき清は清とて清と

〜時分〜

上〜人〜

菅原か多子 上書高田侯歎願書追次刊行

○

○壬辰月廿九日 佐出の序書付家

慶長伏罪之上 佐川家名未續之義 祖宗以来 切勞
誠 恩百格列し

敵慮誠以 因安無之 助に 佐出の事

但一城地録言に 佐出の事

○

中渡

本五月廿日 兵服摺收野邊河 与至安子 於之 蚕種紙生
糸内政 不之 乃建印 稅取入 子 成 外角
大総督 封金 計裁 判不 与 水 建 与 之 小 号 以 角 町 中 長

不虞振事、本約原之、乃也

辰四日

内外新報第廿六號

慶應四年閏四月二十八日

○同日庚辰日

徳川□□水戸表は退死後謹慎恭順、乃相之、以全く
玉城相出先、海懐致、以之、以常之寛典、以之、以之、
以之、相返退、之、系、以之、以之、以之、以之、
府は、所、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、
大惣官為陣、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、

東海道

大惣官参謀

栗山

如蔭

奥羽

官軍隊長中

三條大納言

今般德川□□隊伏謝罪事
敵魚寬曲之涉不長也
安堵以極計之致想之涉者
河沙法以事

後四日

河原新平

小笠原唯八

新田三郎

右日對以付附事

後四日

新里小路弁

今般關東監察使

房東下取 出出小事

後四日

松尾伯耆

中門對馬

三條大納言為國東監家後東下取 出出小事
出出小事

後四日

三條大納言殿去子共二日後西撤口涉屋中

高田後歎願書

徳川□□從前遺失有之、以事又、不妻依兄有相色、以
之、先修、若我事、乃、以付、行征討、出
以、天威、最、恐懼、以、不堪、我、懼、至、事、以、私、修、徳川
氏之、河、以、来、世、孫、の、萬、民、以、涉、所、以、事、若、年、不、肯、故、技、持、臣
故、也、不、行、在、行、極、く、場、合、以、至、事、以、了、也、實、以、其、罪、難、逃
上、の、事、對、天、朝、申、上、徳川、氏、下、を、私、親、宗、以、對、し、面、目、也
之、次、才、以、其、事、私、修、遠、方、隔、如、兵、居、以、事、故、不、事、以、我
年、の、始、末、織、策、承、知、不、仕、以、以、全、□□不、行、辱、一、時、以、
失、より、其、悔、宸、襟、以、次、才、以、至、事、以、恐、懼、至、事、其、陳、謝

極無沙塵の然るを垂天と下率去の漢皆 王土に付
吾朝のあわくの必要必殊に所史新相成りく□□天
地間の身の操所方々万安右極相成りく□痛痒不問
者もくも不堪憐強く世存況や私身よにまら実以日夜
痛哭仕りくも悲哀不滅水難も難入に次身以い存に何
率天地包合く大恩と以く今般く遺失 所害殺を感下
以孫世安教の巨徳門家康天下に大勲有る擲風休而
貞仁以來く大仇と掃蕩し之百年来太平と泰と寧き其
安 宸襟丈より以來列世恭順崇敬く成 列聖所窮得
不流然るに□□一身の血矢と以く宗社勿渚不紀事に

相成りく□□泣血悲痛を世と身と為く作れく□徳門氏先
祖以來く勲勞恭敬深く 恩名存下垂寧く 所仁惠と
多あり 皇宗廟社授永存仕り極所不盡を成下いり徳
川氏臣子一同奉造く 大恩と感戴して世に及ぶ哀悔に
六指所皆一もく民に沙塵の□□□□私祖宗以來無量
く 天恩と為い世り重賜く而露に休休仕いゆ人私言
從來勤 王く志願寧く心掛け存在に世皆其哀悔に執
莫大く 聖慈と以く所拜喜に下皇徳門氏依然血合仕
いりく 恩とく恩惠とく其如何報効して仕非実以く感激
噴發向は金量其福力に仕其世に哀痛憂懼に感く不

源三郎が哀れに臣等御成り成下る事其れに成也
誠惶誠恐頓首謹言

二月

○ 奥羽全澤の國に於て其れに相成りて其れに地
とて由里の若く活し得候事と相成りて

○ 九州地方邦宗一揆凡そ七十八人其れに起るに在り
付肥前の人數に退く由相成りて其れに中肥前屋敷横濱
より亦由りて是れに竹田に在り

○ 世に於て其れを其れとて

かまねの御身はくちとらにむきとらとらとらとら
はと其れを其れとて

取以子

○ 国月十三日悪水戸表よりの来状

一 去月下旬の浪水府諸生方より内務本石見友於八右衛
右取くと獄門に相成城下町中へ右首級さす一有る
事

○

本月十八十九廿一日今市戦争の確報を得多し第廿八
號に記す且つ地圖を出し其事實を詳かき但し廿
一日、闘争官軍方土兵の奮戦脱走方奇策を用く遂に其
鋭鋒を摧き官兵敗績に至るの事件を載す

内外新報第廿七號

慶應四年五月二日

○京都よりの來状と抄出

辰三日朝日會藩宗老柳系源兵衛上系い

天朝幕に 宥極門家に中出

今段松平肥後守儀 朝敵の名を蒙り會て忠入に

去肥後守に於ていそ忠受系い今 朝敵の名を蒙

る退封に 治出に所行を忠入に在に付肥後守儀

朝敵より所行にとも元來松平肥後守家と候に保料

以て所望をうけに付今段肥後守松平此稱号を徳門

口返却了任以家路... 若使守を以て保科家相續
 其後... 士氏一等... 於恩を重し忠節を了
 其後... 時時... 中出... 今追討
 赤崎... 中出... 今追討
 中... 國... 今防戦...
 内... 皇國... 今防戦...
 今防戦... 皇國... 今防戦...

人殺を以て先陣... 人殺を切崩し... 過き...
 仙... 中... 今防戦...
 今防戦... 皇國... 今防戦...
 今防戦... 皇國... 今防戦...
 今防戦... 皇國... 今防戦...
 今防戦... 皇國... 今防戦...

聞
右ノ通言ハモトト下指不人ノ々々津家来レ礼ヲ顯
シ出之ハ多クハ事

○
一友人東奥ノ逸事ヲ探撫シ寝^アめ^ク十殺衆ヲ斬シ我社
ハ投興セリ固ク内ハ新報廿一号より逐次挿入シ
之^ハ以^テ書^キ附^シレ

或^レ人ノ活シ^テ聖州^ニ由^テ送^リ返^ルニ^テ戰^ハ年^ノ始^メシ^ハ晚
老^ノ人^ノ弟^ト僕^ト怯^ク旨^ヲ以^テ之^ヲ退^ルハ^テ右^ノ鎮^ニ按^テ之^ル

官軍^ハ向^テ以^テ付^テ支^ヲ防^シ禦^セんと^シて^モ遂^ニ以^テ合^テ戦^ハ成^ル
里^シ好^ク固^ク之^ヲ双方^ノ之^ヲ罷^トと^シて^モ官^ノ軍^ノ晚^ニ兵^トも^ハ以^テ戰^ハ
地^ヲ引^キ去^リて^モ以^テよし

○林系清記勅 之^ハ後^ニ以^テ付^テ若^ク出^テ以^テ款^ヲ種^ト書^キ毎^レ
所^ニ下^シけれ

世^ニ思^ヒ以^テ書^キ附^シ其^ノ形^ヲ之^ハ以^テ叙^シ先^ニ程^ニ之^ハ後^ニハ
仁^ニ本^ト之^ハ伊^ノ丹^ノ之^ハ家^ノ位^ヲ辨^テ固^ク志^ヲ叙^シ林^ノ系^ノ郷^ノ之^ハ居^テ位^ヲ仕^テリ^テ林^ノ系^ノ
以^テ帝^ノ也^ノ身^ヲ至^リ始^メ之^ハ家^ノ名^ヲ林^ノ系^ト相^ノ以^テ之^ハ後^ニ執^テ其^ノ之^ハ退^キ之^ハ
河^ノ國^ノ安^ク祥^ニ之^ハ之^ハ誠^ニハ^テ固^ク居^テ仕^テ居^テ之^ハ以^テ去^リ地^ノ之^ハ河^ノ國^ノ情^ヲ叙^シ以^テか
附^シ居^テ仕^テ里^ノ以^テ以^テ付^テ固^ク居^テ仕^テ居^テ之^ハ以^テ去^リ地^ノ之^ハ河^ノ國^ノ情^ヲ叙^シ以^テか

百三十三
ありては後臥百之指七石庭所願仕りし後林系六右衛門
の子林系一右衛門兼寛永の以 新院所不附系 以
付江叙從下位下位法路古之柳王出格の儀をりつと
朝恩と蒙り長く在系は為 以付冥加と相付ひ親授を
世と事難有後以甘奉と之上新以山城國相樂郡相樂村
以ありと石所加増新下位新上野國又百石知行所
庭以以付右返知仕り山城國又ありと一取六百石下場
部合八百之指七石庭以新落成以在系中其叙以私家と
系夫法路古以男林系古平古に在り内之百石知行仕り
以終り系私系大書以と成り上系是と國字概に是まに

和宗所出勅道其勅 是と志且父以法庭と受世及系據
所一新の所布令系 以出以以付てハ係以と勅 是正
義と所其の相勅也度受ハ其叙叙奉ハ以法庭と依り世
從上系仕りハ百法庭奉有り院叙叙仕りハ小身微力と
儀以と其思入ハハと由何奉前件 新院所附系 以
付以所中諸由法庭以以付 以儀察系為成下相意と所
用系為 以付新下以と 廢大と依難有奉其何分
所寛恕と所不意ハ為成下以系所概奏其叙と以成思減
惶頓首謹言

四月四日

林系清記

先を引取り事

方今我々新報の世に公行するや益盛大にして寒郷僻
邑も到らざる如く牧童漢兒も着ざる如く然るに上書
建言の如きに至つては文字間了しながさきゆを因りて
二三を披ひ附きたる因字を以てし解するに俚語を以
てし集録し内外新報字類と名づけ上梓し以て童
蒙の便を發兌進まにゆく

内外新報第廿八號

慶應四年五月四日

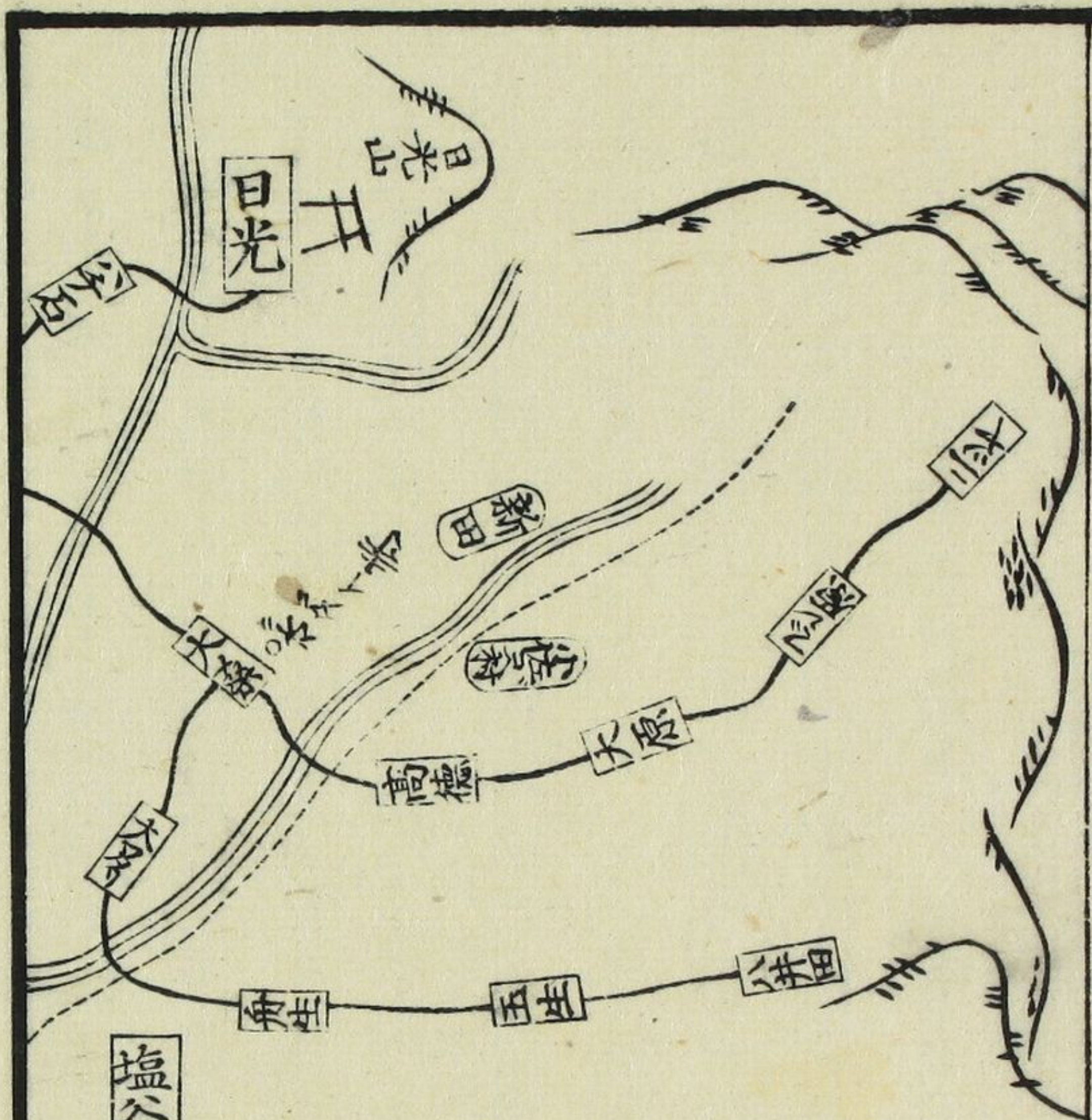
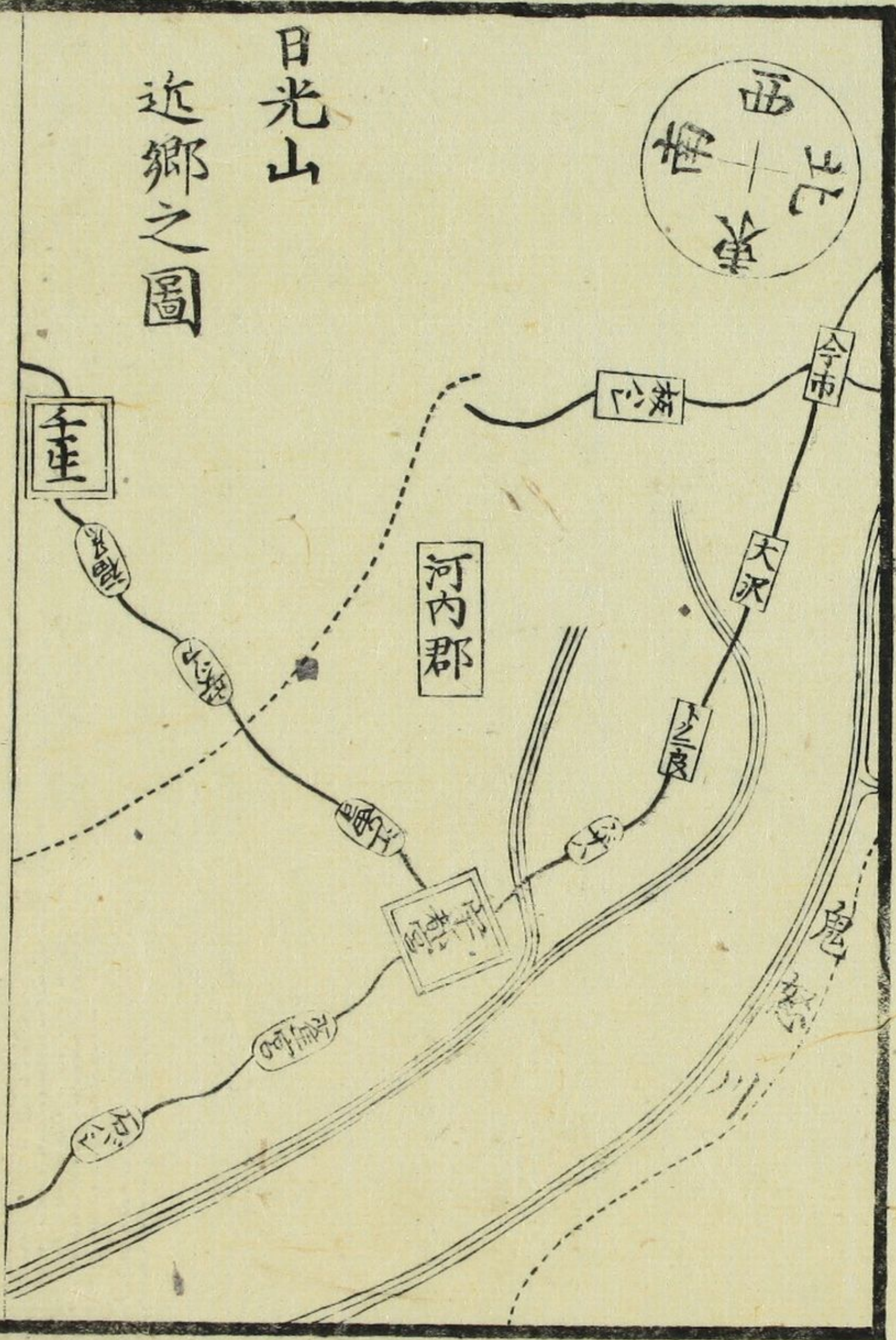
同日十七日の夜日光寺科野お河内郡大桑村宝蔵寺
と申家宰善徳寺境内多羽に表林有る木をオホお敷ひ
場下へ脱走無凡お捨人程鷹と發見し其翌十八日今
市宿澤南の土お野凡お捨人程宛交代はく巡邏メウロ以
多し行ふ如く宝蔵寺境内下を通りせしおかゝ脱走
方儀と報しを發しく砲發及びびは故官軍敵くは打
面分同宿へ引取し即死七人お負六人有る中脱走無

まより同日新紫新田に引揚る

同十九日新田に敗走に付去勢勢上を急以早打を以て
日光山の屯營せし彦根勢に援兵を乞ひ軍儀を狭し
去勢人殺合せし六百餘人同日曉に退り出張新紫
新田に押向け砲撃以多し以て晩迄兵將多あり有極
以て一時に窮乏し同圍詰新田佐越村の方へ逃散
るあり官軍討策といふ付り此勝の意を遂に志不
るに小佐越の紫新田の村に入合せしむるに野原
有る竹の間にセウ後方急々人長指不間幅三間程の陥阱
三ヶ所掘り置しハ其意は後方官軍此不まて退

味方しが忽ち北中に陥入る愕然と驚く折しも側の
藪蔭又も山中上を伏兵透間より起るを去り三方上
より取圍と打をけるより官軍危急にお見入之を救え
んと後供の兵繰出せし又途中に遮ら進退自由
ありんを降す系に討たれ遂に大敗走と成り付
死廿八人負傷八十人敗走の意極至生に相引し中
より去勢勢の今市宿彦根勢の日光山へ引揚は去
勢の始末官右河江沙汰に及び退り人殺出張の
よしに相聞也是日晚迄方生捨口十人余免怒川を渡
り大系後方去勢村に退陣せし

日光山
近郷之圖



或ル新聞中
本月廿日ノ
戦事ヲ載ス
トイヘ氏廿
日ハ戦争ナ
カリシ

同女二日晚走兵三百人獲之國味へ出張右征伐として
上妙前持多傍伴勢勝の三萬人殺死す百人獲りて
縁出し以中

○閏四月十七日序觸書

今我諸國大小之林社に於て林佛涅槃の義に法廢止又
相成以に付別當社僧之輩に還俗之上林社人等之稱
号に相轉し社道をめぐる勤仕を致し若し無指張文へ
こそあり且に佛教信仰に還俗之義不以心之軍に林
勤相心之退下中事

但還俗のみの僧位階官互上勿偏以に官位之義に

退く 伊沙法了有之の事高今之官服の風形為懼
不降衣白髪垂長用勤仕了終中事

是迄林殿相和め居小者と席唯之義に之と相出下中
以之上伊沙法調之上に之 伊沙法了有之の事

後四月

書懷

失名氏

漢家自一解權勢、逐鹿諸侯如是多、往日嘗君今有否、空
彈長鈇唱悲歌、

同日月夜たる曉六時頃津川伊勢崎町圍宿屋を襲へ
 竹者共知を以て十人程裏表より押し入る小銃を打
 かけ白刃を搦き切入しに於し由經夜の時方あるは
 南直の士も熟睡して番付を走るに不意に討まはれ
 慌きを以て口又人手を被切せしが是より用を有
 るん衆中の士退く一団は切らぬと出くまはれ
 く防戦し遂に賊を邸外に逐出し蹤跡を絶つるに
 帰らざるもの風多あり其後賊を捕獲しや否や
 但し右の同宿屋に家来を中へ君侯を奪ひ去ら
 んとて官軍の士と打交を切せしは君侯ハ竹方へ

々を退かせし辰合せがとの風況あり

○補遺

四月廿九日野洲へ脱走の兵隊長某の策謀以て同州
 於賀赤野に村地内十文字とて往還有る日光山より
 東に一里半許隔るい坊石へ喰遠の胸登りて築き大砲
 を備へ防料の手筈以て胸登りて知由より官軍彦
 振土お勢次第百十人許はく押しよせあるは坊石
 辰合せしる兵士後二十日不人終る陣笠を土手に
 のせ色き破還の古石板並木を蔭に隠し居るに
 官軍土手と目かけ頻りに砲撃し十分は近するに死

分を討て井伊家隊長と見しき騎馬の者を人遣り來
りて矢を打ちあはせしむるに憤戦しつゝ官
軍方即死せし三人あり七人あり及びつゝ日那今市宿へ
引退く脱走方かきし舟を人のこゝろに光山へ引揚
げし或人の傍らより突く霧を以て衆を散らし遂に之
に克つ隊長某の膽裂想ふべし

○
紙數限を以て以て廿一日の戦事を脱き又少しく
忌諱ありしもの因りて二三を刪去し他日次篇
に記載せしむべし

内外新報第廿九號

慶應四年五月三日

○菅系のかゝる子 速白書

味死して其言よ今般洋夷人入 於殊湯を為免に
旨且又井越く管見を去り是近者人をむ羊の如く相
卑しめ以て依を止め 皇國西洋と彼を異別せし
本邦に四制を以て相改所改方端も過く西洋各國に
法事操中法國体法變更に相成り旨傳旨仕は是に定
む甚深く 聖旨より出せ且又文武諸臣熟議せし
在賛成し法事と其存りて彼是等しといて甚以て

思入事... 朝伴湯... 韓渤海... 天朝... 相成... 夫共... 來... 相成...

と稱... 殊... 像寒... 何者... 國体... 廢存... 言...

上の得た是ハ 皇國漢土の之に拘らば假令西洋者
 國と雖も其國君臣等ハ自國を尊大に不仕ゆとい
 其國の治を維新者に法を以て門巷に細民人と家僕石
 使の者れりも其家主を世に由りて教大切あり若
 以て其法を以て一家治を為す況ん 皇國ハ之を奉て
 皇統連綿と 所相續するに由りて全く荒れ合して
 天朝を無限に崇仕しより如世君臣と大分相亂せば
 其國に絶縁仕ゆと世尊大に教に法を以て又其國を大
 以て仕ゆは地を穢ゆと自然の勢に法を以て然るに今
 其尊大を相心ゆりて自ら其國を破るに法を以て

國體破るゆりて其國威自ら萎靡仕ゆ被漢土人尊大
 以て其法に臣制しとす以得るも宋明清杯何れも實
 易和儀を以て國を保る吏人に愚弄せしむる事漢土
 人之強弱晰に法を以て其思思今こそ全く漢土に覆
 輒て其法を以て其法と其法に加之 皇國漢土とい近
 隣に國柄は其人情風土も古の之相習を不申しは其
 西洋に教を以て其法を以て其法と其法に加之 皇國
 人をして其法を以て其法と其法に加之 西洋人と模倣せし
 め其法を以て其法と其法に加之 西洋人と模倣せし
 利を貪る礼義廉恥を知らば其帝王は其相稱ゆり

由巨商と同様之者に育ていふ 皇國に仁義勇武
 と風俗と仕の國といふ事と不同に且て天子様教と
 母し天主と大君大父とし真の君父と小君小父とし
 假令大衆を祀しといふも天主に媚びまゝ者に地獄に
 隨落し小根と相啜いふ事其君を無し親を無するの
 教に非ざるに世教蔓延仕いへむ之程不常も廢弛了仕
 小方今之形勢鎖攘之端に達し雖も非和親交
 易に事なくといふ 皇國に治安危に相拘とすとい説由
 有るに即今之和親亦極と由治安危に相拘と
 事あり彼の清國体相違以上世近諸國和親等も清振

今に之を市況免殊なる在國使探一通外華も清に扱
 以て清揚治なる在在に於て取伏不仕に於て我軍に
 及て然と事ある若清國体と事あり破いし和親交易
 清洋客に相成いしに其端接表の害より甚安事あり
 其故に彼事事今世大軍といふ末冠仕に共 皇國
 と人心一致し之様仕に於て自ら義勇之士奮發激
 勵し心を引起して甲冑刀鎗を爲我長きる不仕に
 之力我防衛仕に於て是を清大捷了する在是時こそ
 清國威とす内之照耀して遊者又若く一連年之防我
 以内北府弊危殆に及いとも 天能始程とす初歴

物々 聖靈別々先物在天々 神靈以爲對少し由
 所為懐以而平々其意を世傳以て洋考く制と爲る更
 以て天下有志者之形々以て之を知く匹夫匹婦之玉
 之を皆 天物を懐以て守り難報を解と相成て中破
 逐賊□□大罪を蒙り以て本之介夷交陸上を起す以て
 是又不休を抱きて中介夷の相垂著痛く内以大徳を
 生して中若又内地大愛を生ず以て一ハ救年ふく心
 しと 皇國をく夷風に相成若又之を全しと下を死し
 妖邪腥穢礼儀滅ふく域にて相成以て必定く其と其取
 以て同交に痛哭泣涕長大息と堪くを以て童子婦女子と

此を以て天下重大と事件容易に献云仕以て間を以
 ざる戒を犯し僭踰不遜と罪免以て以て由漆室難矣
 と輩皆女を以て國事を憂い事古人も是を罪とせ
 らるる以て事遜との赤心生れが 神お夷狄に沈
 む事見ると思ひは然る以て第一狂替く管見蕭蕭と
 謀る等 所種に以て其の意を以て其の在り以て其後檢
 刀と我を更い事由祈禱せざるを以て其の在り以て其後
 以て其方以て愚衷清浄懇以て其旨を其清奏 聞其希
 以て滅惶滅恐死罪死罪償也

菅原朝臣董子泣血殊上

美子の伏見宮の殿上人若江修理左史の女形、社
蘭と号し又秋葉とも云々年廿三歳草莽を結び和歌
形ど人より教へて書きたるを著し流人競ふべく之を控
かんと思し以て儀論を述ぶるも常に皆屈膝して帰
ると云想ひ慕娘、附女の亜流形云々

○

フロイセン 船又松山藩家族國元江引揚りよし
崇徳生オルカリン 今三日十二時不海出帆以多し

内外新報第三十號

慶應四年五月四日

○後四月十五日出上方より其の来状

當時信人ども尾羽城へ攻穿し風雨有るに於て同家
人数少くは當方引拂ひに相成りし
近藤勇も八日より三條大橋より下河原に於て梟
首せしむ
右奔札の寫

元新選組

近藤 勇事

大和

此の元悪の罪迹乃事と有之上此度軍勢勝治武
公流山兩牙にわたく官軍に敵討せし段大送なる
よすつゝ如此令鳥首との如き

大坂河城外近傍の地を授け豊臣秀吉公御社壇御造
営有之旨去月六日付仰出の事

○四月廿一日神祇局并兵庫裁判所より
寺沙汰
之寫

大政更始の折柄表忠之盛典は行天下之忠臣孝子
を勸奨に遊ばしに付之に楠贈正之位中将正成精忠節

義其功烈並に輝き真に千歳の臺人臣子の龜鑑に
以故今段神号を追益し社壇造営に遊ばし思食に
依之金亦兩所穿附する在の事

但正行以下一族之者各鞠躬尽力其功勞不少段追
賞に遊合祀之有之旨に仰出の事

別紙を通楠社造営に仰出に付之に天下有志
の者御手付致度及申出に付を御覽候し相成に
間其地之如何に程候に計極に仰出の事

四月

○四月十八日

大原中納言

笠松裁判所總督江 仰出美濃飛驒了の支配事

林 左門

徵士内國事務局權判事江 仰付笠松裁判所 在勤了
有之事

梅村速水

右門斷江 仰付

東久世中將

英吉利、仏蘭西、字漏生、伊太里、魯西亞、和兼院、右六ヶ國
へ為使節、渡海了致旨江 仰出小事

四條大夫

同月十九日

新撰裁判所總督兼北陸道鎮撫副總督江 仰出小事

安井和介

徵使内國事務局權判事江 仰付新撰裁判所 在勤了
有之事

滋野井侍從

同月廿四日 先渡國裁判所總督江 仰出小事

山東一郎

同月廿九日 徵士内國事務局權判事江 仰付箱館裁判所 在勤了
有之事

小野傳捕

右内新 仰付

松方助左衛門

徴士内国事務局権判事 仰付長崎裁判所 在勤 有之事

平松甲斐権介

三河国裁判所 監督 仰出遠江駿河 支配事

同四月三日

藤村四郎

徴上内国事務局権判事 仰付三河国裁判所 在勤 有之事

山本一郎

大橋慎三

右方人同新 仰付

○水戸上皇の来状

同四月十二三日頃より常陸鹿嶋を経て脱走兵五百八十人程屯集せし十九日以官軍牛場村を出張し細川勢の中百人餘を以て死出降伏し等掛合及び以て脱走兵の八割を一戦以て首堂家の人數多分討死しへ降参し上皆殺しよすお然との掛念は未だ承伏せざる趣風聞に事なり
但その後掛合相逐き江戸へ引還りに相成りよし

○朝廷より大垣侯に御沙汰書く事

其方家來在坂中尚正月三日後不容易討然に立到るに
之甚對 朝廷如何之有之其止入京の事其方在國中
以く不迷取れし歎願の者徳川□□上洛に付俄に供仕
中付居るに途中不意我關の事起り警入信表に及相致
在に交終り不日朝に玉に余等其功合に之先事之者
一小我の及に御沙汰思入に右ハ今之家來之不束に之
其方之於之ハ素より 朝廷へ女二之忠勤之是し之中
心底に有之御罪と道相之帰順之等中出に以付格別之
思念を以之其 聞合居隨之東征先鋒也 終對奮勵幾

關仕其実効相顯るに之ハ其功者以上を右罪非有免之
相成に音兼之 御沙汰之趣由有之に交に他略之亦用
相勤御交去る三月九日武州梁田侯に於て一戰決し彼
是実効相立に勿論宥赦出先家來共不束とハ此中若く
大義順逆之不相弁次其方今之家來共への示方不其
屋に相違に以付既分御咎也之 御付之亦格別寛
大に 御仁惠を以て之免に以て之圓倫一定務之忠勤
之勵切極之極 御沙汰之事

但其對 官軍戰事に家來之不意之其本文所寛大之
旨趣に準し隊長以上重之に者死一爲と減し亦禁廻

丁中付以其余の刑法に取替ふに及ぶは以て尤も相
 海の上姓名及び共太政官代刑法事務局に丁中出以
 事
 附より存し面々新持て銃炮取揚並有之に之を律に揚
 結 仍付以条太政官代軍防局へ丁中出以事
 四月

結

結



